

DREW 女史の家を訪れて

時 田 邨

1 昨年(1967)の暮から昨年(1968)の4月まで文部省在外研究員として欧米に旅行する機会を得たが、旅程を立てるに当つて是非訪れたいと考えたのは英国 Manchester 大学の DREW 女史であつた。偶々1 昨年(1967)の春、チガイソとコンブのキメラの標本が手に入つて非常に珍しいと思ひ、英国の Nature 誌に投稿を思い立つて編集者への紹介を女史をお願いして快く引き受けて下さつた旨のお手紙を7月11日附で受取つた。その後、宮部先生のコンブ科の英訳版が出来上つたので別刷を送つたところ、その受取りと一所に入つて来



“DREW 女史”

たのは、女史の生前を記念する Thanksgiving の集会の案内で、9月14日に逝去されたことをはじめ知つたのであつた。ついに生前の女史にお会いして親しく日本の海藻研究者の一人として、また日本の海苔業者に代つて、海苔の *Conchocelis* 世代(貝殻に内生する糸状体)の発見に対して敬意と謝意を表する機会は無くなつたのであつて、非常に残念に思つた次第である。それで、せめて女史の研究室と、住家を訪れて弔意を表したいと思ひ、御主人である同大学工学部の BAKER 教授に手紙を差上げ、ダブリン市から空路マンチェスター市に着いたのは、昨年(1967)の2月7日の夕方であつた。翌日の午後、BAKER 教授が車で迎えに来て下さり、大学の植物学教室を訪れることができた。女史の研究室には片隅の机の上に海藻培養装置が小じんまりと出来ていて、温度を調節するために装置全体にかぶさる被いがあり、ハンドルでガラガラと鎖の仕掛で上げ下げできるようになつていた。この装置は BAKER 教授が夫人のために作つたものだとのことである。米国の各地の大学で見た培養室や、ゲーテボルグの LEVRING 教授の所の培養室などにくらべて、いかにもささやかな間に合せの装置である。しかも、これを使つてあの海苔の糸

状体の発見をはじめ、ヨツガサネ属 1 種の生活環を実験室で完全に追及するという紅藻では初めての研究や、その他の紅藻の生活史や細胞学の研究を続々と発表したのだと思うと、一層敬慕の情を強くしたのであつた。夕闇せまる大学をあとに、静かな落ちついた住宅街を通つて大きな二階建の BAKER 家に客となり客間に通された。すると目についたのは北海道の熊の木彫りをはじめとする日本の装飾品である。わけを聞くと若い頃、いま北大文学部の客員教授として札幌に居られる H. M. LANE 氏と同じ学校で学んだことがあり、それ以来の親交を結ぶ間柄で、これらは同氏から贈られたものだという。海苔の研究を通して日本と特に縁故の深くなつた女史の家庭が LANE 氏を通して既に早くから日本と或るつながりがあつたということは奇縁であると云えよう。客間にあるグランドピアノは女史の弾いたものかと思つて聞いたところ、これは娘がひくののだとのこと。同家には年頃の令息令嬢お二人が居られ、令嬢に会うことができた。家の主婦を俄かに喪つた悲しみを語る教授は見るからに淋しそうで同情に堪えなかつた。海苔の *Conchocelis*-phase の発見は全くの偶然で、彼女自身も意外であつたらしく、非常に喜んでいて、と話された。ここに掲げる写真と、紅藻の生活史に関する総述の別刷をいただいて辞去したのである。(Revue Algologique の昨年 10 月号には、同じ英国の NEWTON 女史の書いた追悼文と、著書論文のリストが載つており、肖像画の写真が巻頭を飾っている。)

(北海道大学水産学部)

国際海藻雑誌 “BOTANICA MARINA” の刊行

昨年第 3 回国際海藻学会の席上、LEVRING, HOFFMANN, FELDMANN 氏らによつて提案された国際海藻雑誌の刊行の件は、いよいよ次のような趣旨で実現の運びとなつた知らせがあつたので紹介する。

雑誌の名称は、“BOTANICA MARINA” とする。大きさは 17×24.5 cm, 32 頁およびアート紙印刷 2 葉とし、年 4 回発行、工業技術に関する別冊を出すことも考えられている。

内容は、海藻の生態学、植物学、化学、生理学、薬学、浮游性藻類、海藻工業、および海藻を原料とする生産物に関する原著とし、用語は、独、英、仏、のいずれかとし、独文のときは英仏 2 カ国の摘要を附し、他の場合も同様とする。原著のほかに、編集記事、